

(6) 別荘文化に由来する歴史的風致

ア はじめに

明治時代から大正時代にかけて、避暑・避寒・保養の適地として知られるようになった鎌倉では、この地に別荘を構えた貴顕紳士の中で生まれた価値観が広がり始め、知識、道徳、習慣、作法、生業、芸術といった人々の精神や営みに大きな影響を与えるようになった。

別荘地化に端を発し、地域固有の自然的・歴史的背景や人的・物的交流を通じて洗練されたこれらの文化は、鎌倉のまちの発展に大きく寄与した「別荘文化」といわれており、現代の鎌倉に住まう人々の趣向やライフスタイルにも、その諸相を見ることができる。

イ 別荘文化の背景

(ア) 別荘地としての鎌倉

明治9年(1876年)、東京医学校に招かれたドイツのエルウィン・ベルツ博士は、予防医学の観点から「保養の思想」を普及させた医師であり、早くから海浜保養地(別荘地)としての湘南の地域特性を認めた一人であった。ベルツは明治13年(1880年)の日記に、健康管理を依頼されていた知人の子供たちを片瀬へ海水浴に行かせたことや、七里ヶ浜の海岸が自分にとっては日本で一番美しい地点であると感じていることなどを書き残している。

また、ベルツ博士が招かれた東京医学校で当時校長を務めていた医政家の長與専齋は、明治17年(1884年)に鎌倉の海を海水浴の適地として紹介するとともに自身も由比ガ浜に別荘を持ち、明治20年(1887年)には海浜のサナトリウムである「かいひんいん海濱院」の建設に深く携わるなど、海浜保養を推奨した。



写真2-210 由比ヶ浜(明治時代)



写真2-211 三橋旅館

当時の海水浴は、医療行為として「潮湯治」^{しおとうじ}とも呼ばれ、決まった時間に海に入ることを繰り返すというものであったが、明治18年（1885年）に、長谷で営業していた三橋旅館が「海水浴御馳走」なる広告を「東京横浜毎日新聞」に掲載し、明治21年（1888年）には、前年に療養所としてオープンした「海濱院」が「海濱ホテル」へ衣替えすると、商売として海水浴客を受け入れる体制が整い、医療としての海水浴は瞬く間にレジャーとして定着していった。



写真2-212 海濱ホテル

当時この地域は、水の便が悪く農業には不向きとされ、価値の低い土地であったが、小高く展望が良いこと、松林が陽を遮って涼風を送ってくれること、何より海水浴に便利なこと等夏向きの別荘地としては適地であり、次第に土地の価値が見直されるようになっていった。

さらに、明治20年（1887年）に東海道線横浜・国府津駅間が開通し、明治22年（1889年）に当時軍港のあった横須賀までの連絡路として横須賀線が開業すると、土地の利用価値が一気に高まり、明治32年（1899年）には、鎌倉駅の近傍に御用邸が造営されたこともあいまって、東京に住まう政界、財界、官僚、軍人、皇族、華族などが競って別荘を構えるようになった。現存する鎌倉文学館（旧前田家別邸）、平成30年（2018年）4月に閉館した旧諸戸邸（旧鎌倉市長谷子ども会館）、旧華頂宮邸、古我邸（旧^{こが}荘邸^{しょうてい}）などは、その代表的な建物であり、この他にも往時をしのばせる別荘建築が数多く残されている。

また、別荘地としての人気が高まる中、一時的な滞在とは別に、この地を常住の地を選び、新しく転入してくる富裕層も含めて、彼らはいつしか「別荘族」とも呼ばれるようになった。そして、彼らの生活に密着していたのが、下馬交差点から長谷寺に至る由比ガ浜通り沿いや坂ノ下地区などに展開した商店であった。当時別荘に暮らしていた人々を相手に展開していった商業が、別荘文化の発展とともに拡大していき、今では、この地域は、商店街として活気のあるまちなみを形成しており、別荘文化が花開いた明治～大正時代からの商店もいくつか残っている。

別荘文化が花開いた鎌倉には、「日本基督教団鎌倉教会附属ハリス記念幼稚園」や「日本基督教団鎌倉教会会堂」、「鎌倉聖ミカエル教会聖堂」などのキリスト教関連の施設が残されている。これらは、鎌倉に別荘を持った人々の中に、キリスト教の信者が多くおり、鎌倉の地で礼拝を守りたいとの願いから建てられたものであるといわれている。現存する建物は、いずれも関東大震災以降の建築であるが、伝道の歴史はさらに古く明治30年（1897年）頃といわれており、別荘の人々との関りがうかがえる。

(イ) 鎌倉山における分譲別荘地開発への広がり

海浜部から始まった鎌倉の別荘の歴史は、鎌倉市のほぼ中心に位置する「鎌倉山」での高級分譲地の開発にも繋がっていくこととなる。当時の実業家であった菅原通済は、ドイツ人の貿易商クルト・マイスナーの着想から、眺望の良いこの丘陵を別荘地にしようと考へ、その構想は、最小一区画 500 坪という高級住宅地の分譲販売へと発展していった。大正 15 年（1925 年）に我が国初の自動車専用道路である「大船江の島自動車専用道路（京急道路）」の建設が認可されると、通済は道路建設と併せて乗合自動車の運行を計画するとともに、深沢村の山林を「鎌倉山」と命名し、昭和 4 年（1929 年）から分譲を開始した。鎌倉山には、現在も分譲当初に建てられた瀟洒な住宅や大区画の敷地が残されており、往時と変わらぬ高級住宅街の佇まいをうかがい知ることができる。

また、分譲当初に植えられたと伝わる数百本もの桜の木がまちのいたるところに立ち並び、特に住宅街の中央を走る通称「バス通り」の沿道に並ぶ桜並木は、「かまくら景観百景」に選ばれ、毎年桜の時期ともなると桜並木のトンネルを目当てに多くの人々が訪れる。

(ウ) 鎌倉と文化人

別荘地としての鎌倉の発展は、明治中期から大正初期まで続き、大正元年（1912 年）には町の総人口の約 3 分の 1 が転入した人々で占められ、一部の有力者が有志による地域団体を組織し、より積極的に町政へ参加するようになった。「鎌倉同人会」はその象徴的な組織であり、現在もなお、その活動は続いており、令和 7 年（2025 年）に設立 110 周年を迎えた。

また、鎌倉は明治から昭和にかけて、「鎌倉文士」と呼ばれた多くの作家や詩人、歌人、俳人などが移り住み、文学との関わりが深いまちである。明治・大正期の文学史上、重要な位置を占めた文学同人誌『白樺』は、そこに集る同人の多くが富裕階級の出身であり、長與専斎の子である長與善郎の家などを拠点に活動していた。その後、関東大震災で東京が大きな被害に遭ったことをきっかけに、文学者の一部が温暖な気候に恵まれ、歴史と緑に包まれた環境に惹かれ、東京から鎌倉へと移住した。大正 13 年（1924 年）、14 年（1925 年）に相次いで鎌倉に移り住んだ里見弴と久米正雄は、昭和 11 年（1936 年）に「鎌倉ペンクラブ」を発足させ、永井龍男、大佛次郎、川端康成、横山隆一、小林秀雄、島木健作、川喜多長政、川喜多かしこら 42 人の作家、文化人が名を連ねた。また、久米正雄と大佛次郎は、昭和 9 年（1934 年）から約 30 年にわたって続いた、夏の風物詩「鎌倉カーニバル」を発案するなど、地域に大きく貢献した。こうして昭和の文壇史に大きな足跡を残す「鎌倉文士」たちを生み出した鎌倉は、今も多くの文学者を受け入れ、新しい文学をこの地から世に送り出している。

平成 2 年（1990 年）に市教育委員会が発行した『鎌倉文学碑めぐり』によると、鎌倉に

は七十数基に及ぶ文学碑があり、その中には由比ガ浜に住んだ俳人の高浜虚子庵趾・句碑、長谷寺境内に建つ久米正雄の胸像など、鎌倉文士ゆかりのものが多く、これら市内各所に点在する文学碑からも鎌倉が文学のまちといわれる由来が感じられる。加えて鎌倉文士の作品の中には、鎌倉のまちを取り上げたものも多く存在し、作品に登場する市街地を歩くことで、当時のまちの息づかいを今も感じることができる。日本人で初めてノーベル文学賞を受賞した川端康成は長く鎌倉に住んだことから、『山の音』で長谷の自宅付近をモデルとするなど、作品にも多く鎌倉を登場させている。

ウ 建造物

(ア) 歴史的風致の形成を担っている建造物

a 別荘建築物

(a) 鎌倉文学館(旧前田家別邸)

鎌倉文学館は、昭和 11 年（1936 年）に旧加賀藩前田家第十六代当主前田利為まえだとしなりによって建てられた鎌倉の別荘を代表する建物の一つといえる。設計は渡辺栄治、施工は竹中工務店によって建てられた。海岸線と並行に走る由比ヶ浜通りを山側に折れた高台に位置し、眼下に相模湾を一望することのできるこの建物は、佐藤栄作元首相が別荘として利用したほか、作家三島由紀夫の小説『春の雪』の一場面にも登場する。昭和 58 年（1983 年）7 月、前田家より市が譲り受け、昭和 60 年（1985 年）10 月に鎌倉文学館として開館した。登録有形文化財である。

この建物は、1 階は鉄筋コンクリート造で、2 階と 3 階は木造である。外壁は当時鎌倉の別荘建築物に多く用いられた二丁掛タイルで、半六角形の張り出し窓に、半円形の欄間の飾り窓、パラペットの装飾、ベランダの手すり等洋風デザインの導入をみることができる。一方、瓦葺きの切妻屋根と深い軒の出等和風デザインも見られ、全体的には和洋折衷の外観を呈している。内部は、アールデコの様式が随所に見られ、当時入手が難しかった大理石を用いた玄関や暖炉、床のモザイク模様の寄木貼り、ステンドグラス等はこの建物の重厚さを伝える要素となっている。



写真2-213 鎌倉文学館(旧前田家別邸)

(b) 旧諸戸邸（旧鎌倉市長谷子ども会館）

旧諸戸邸（旧鎌倉市長谷子ども会館）は、鎌倉文学館の南西の閑静な住宅街に佇む小さな洋館である。明治41年（1908年）に株式仲買人として財を成した福島浪蔵別邸として建てられ、当時は現存の洋館部分の北側及び北東部に和風棟が建ち、広大な敷地に庭園が設けられていたと考えられている。これらの建物は、大正10年（1921年）に実業家の諸戸清六別邸となり、関東大震災に遭っても建物は健在であったが、昭和51年（1976年）頃から建物が使用されなくなると、広大な土地はその殆どが分割され、23の宅地に姿を変えてしまった。昭和55年（1980年）に寄贈を受けた鎌倉市がここを鎌倉市長谷子ども会館とするため改修工事を始めた際には、和風棟は殆ど姿を消しており、代わりに市は洋館部北側へ鉤型に建物を増築し、洋館と一体化させて子ども会館とした。現在、創建当初の建物は2階建ての洋館とその北側の廊下部分、及び蔵のみであるが、市による改修時も旧状に復するよう注意深く工事が行われている。



写真2-214 旧諸戸邸
（旧鎌倉市長谷子ども会館）

この建物の外観は、バルコニーの柱にギリシア建築の様式を取り入れ、メダリオン飾りが付けられており、ドア枠と窓枠には手の込んだ装飾が施されるなど、きわめて華麗である。また、内部も古典的な雰囲気を感じられ、明治期の貴重な遺構として、登録有形文化財に登録されている。

(c) 古我邸

扇ガ谷にある古我邸は、鎌倉文学館、後述する旧華頂宮邸とともに鎌倉三大洋館と呼ばれている。大正5年（1916年）、三菱合資会社の専務理事であった荘清次郎の別荘として建てられ、その後、日本土地建物を経営していた古我貞周が昭和12年（1937年）に取得した。首相を務めた近衛文麿や浜口雄幸なども別荘として利用し、現在は飲食店として活用されている。屋組みに釘打ちされている棟札の表面に「奉齋 屋船久々能知神 大地主神 屋船豊受姫神 手置帆負命 彦狭知命 大正五年丙辰七月十一日」、裏面に「願主 荘清次郎 設計主任 櫻井工學博士 現場主任 南邦政 請負人 植村喜三郎 棟梁 加藤源治 副 杉崎榮太郎」と墨書されていることから大正5年（1916年）に建築されたことが分かる。



写真2-215 古我邸

この建物は、宅地部分だけでもおよそ2,300㎡、山林部分を含めると5,000㎡にも及ぶ

扇ガ谷の一つの谷戸全体を敷地として建っており、延床面積も 500 m²を超える稀に見る大規模別荘である。西側が洋風の主要部、東側が和風のサービス部分に大きく分けられ、八角形の突出部分の屋根の反りを除けば、内外ともすべて直線・平面で構成されており、非常にシンプルで簡素な造りといえる。ほぼ外壁の全面を覆うシングル（柿板）張りが特徴的で、見かけ上は正方形に近い柿板で覆われているように見える。屋根もまた天然スレート葺であり、全体が鱗で覆われたような印象のある意匠をしている。鎌倉の別荘地時代を伝える貴重な遺産の一つである。

(d) 御成小学校旧講堂・旧鎌倉図書館

現在も鎌倉駅の西側一帯に地名として残る「御成町」は、この地に御用邸が存在していたことに由来する。御用邸の存在は、貴顕紳士の集まる高級別荘地として認知されていた鎌倉にとって、ステータスシンボルともいえるものであった。

その後、御用邸は関東大震災によって殆どの建築物が倒壊したため廃止となり、昭和6年（1931年）に小学校等の教育施設建設用地として鎌倉町に払い下げられた。

御用邸の跡地に現存する御成小学校旧講堂は、洋風建築と和風建築のそれぞれの特徴を取り入れ、昭和8年（1933年）に建てられた木造平屋建てであり、屋根は鋼板葺で建築面積は 684 m²となっている。

旧講堂の近傍には、市民の寄付によって建てられた旧鎌倉図書館も残されている。旧鎌倉図書館は、昭和11年（1936年）10月に開館した2代目鎌倉図書館の建築を基本とし、令和5年（2023年）3月に改修された建物で、建築竣工年や設計者、施行者が定かではないが、開館日より、昭和11年（1936年）には建っていたことが分かる。建物は、木造（一部鉄筋コンクリート造、鉄骨造）2階建て、洋小屋組の造りをしている。改修後も、モダンな意匠に和風の味わいを加えた竣工当時の建築物の外観と構造形式の特徴をよく留めている。昭和初期の鎌倉中心部における、関東大震災後の復興の様相を今に伝える建築物として、景観の形成に大いに寄



写真2-216 御成小学校旧講堂



写真2-217 御成小学校校門の冠木門



写真2-218 旧鎌倉図書館

与している。

さらに、これらの建物に挟まれるように往時の面影を残す御成小学校校門の冠木門かぶきもんが建っており、校内の豊かな緑と相まって道行く人の心を和ませる風景を形成している。登録有形文化財である。

(e) 旧華頂宮邸きゆうかちょうのみやてい

旧華頂宮邸は、文治4年（1188年）創建の浄妙寺や竹林の庭で有名な報国寺ほうこくじにほど近い、衣張山東側の静かな谷戸の奥に位置する登録有形文化財である。

昭和4年（1929年）春、華頂博信侯爵邸として建てられ、当時から常住の住宅として用いられていたというが、華頂夫妻が生活したのは数年のみであった。その後、たびたび持ち主が変わり、昭和42年（1967



写真2-219 旧華頂宮邸

年）頃実業家の松崎貞治郎が購入、昭和45年（1970年）頃から松崎夫婦が常住するところとなり、敷地の最南端の茶室、門及び和風平屋がこのとき東京から移築された。

外観は、洋風民家に設けられるハーフティンバースタイルで、洋風の門、敷地内の樹木、幾何学式庭園と一体となり、往時の華やかな暮らしを彷彿とさせる。緑に囲まれた落ち着いたのある谷戸の景観を形成する貴重な洋風建築物及び庭園で、平成19年（2007年）には、「日本の歴史公園100選」にも選ばれている。

(f) 坂井家住宅

扇ガ谷の奥に所在する坂井家住宅は、東京大学理学博士であった坂井英太郎の鎌倉別邸として昭和2年（1927年）に建築された。

建物は、和館部分と洋館部分からなり、和館は、木造2階建てで、南面して建ち、正面東寄りに玄関を構え、背面東寄りに家政部を張出す。和瓦葺き屋根であり、寄棟・入母屋・切妻など複雑な屋根形状をしている。南面の開口を



写真2-220 坂井家住宅

広めて採光するほか、玄関や取次の間、背面廊下を広めに作られた別邸建築となっている。

洋館は、和館の南東隅に接続して建つ木造2階建ての建物である。敷地の高低差を利用し、洋館の二階に和館の1階を接続する。外観は、スレート葺き屋根、モルタル塗りシン吹付とし、2階出窓の上下に見切を入れるなど、和館と対照的に見せる。2階を洋風の応接室として、洋館併設住宅の特徴を伝える。

和館、洋館ともに登録有形文化財である。

b 別荘文化に関連する商店・施設

(a) 寸松堂^{すんしょうどう}

寸松堂は、昭和 11 年（1936 年）9 月 1 日起工、同年 12 月 25 日竣工であることが、現存する建築届出書で確認されている。設計・施工者は西井喜一と記載されているが、喜一の子息である西井正二もまた大工であったことから、父子で建設業を営んでいたといわれている。主屋と蔵が登録有形文化財である。

3 階建ての塔の頂部に相輪^{そうりん}を載せた姿は、寺院建築を思わせるが、窓は城郭建築に見られる武者窓^{むしやまど}であり、寺院建築と城郭建築が町家と合体したような建物である。由比ガ浜通りのほぼ中間地点に位置し、三方向を通りに開いた角地に建っていることから、その特徴的な外観は周辺のランドマーク的な存在となっており、由比ガ浜通りを行き交う人々がしばしば足を止めて建物に見入っている。



写真2-221 寸松堂

(b) 白日堂^{はくじつどう}

由比ガ浜通りと交わる県道 32 号（藤沢鎌倉線）にも鎌倉彫の商店兼住宅である「白日堂」が建っている。江ノ電の長谷駅と鎌倉大仏が鎮座する高德院とを結び、年間を通じて多くの観光客が行き交うこの通りにおいて、白日堂は、一際目を引く存在である。設計・施工を担当したのは、寸松堂と同じ西井父子で、寸松堂をモデルに建築されたと考えられ、より民家に近い外観であるが、寺院と城郭の意匠を加えた独特の風貌が保たれている。1 階の床面積は 127.02 m²、中 2 階は 36.63 m²、2 階は 41.54 m²である。棧瓦葺（一部亜鉛引鉄板葺）の入母屋で、片側が妻切となっている。昭和 15 年（1940 年）の建築⁵⁹である。



写真2-222 白日堂

⁵⁹ 平成 25 年（2013 年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

c 鎌倉山に関連する建造物

(a) 榑亭^{らいてい}

「榑亭」は、相模湾を見下ろす敷地とその門構えから、個々の区画が広大な鎌倉山にあって今もなお人目を引く存在である。榑亭は、鎌倉山の分譲を行った菅原通済の父であり、鉄道事業家・土木技術者として知られる菅原恒覧^{すがわらこうらん}の別荘として建てられたものである。当初は「清香園^{せいこうえん}」と称しており、昭和7年（1932年）発行の「鎌倉山住宅株式会社分譲地略図（以下「分譲知略図」という。）」に建物の配置がひとときわ詳しく書かれていることから、いち早く具体の建築計画が固まっていたことがうかがえる。恒覧は、当時の戸塚（横浜市）において関東大震災で倒壊した農家を昭和4年（1929年）7月に購入して移築し、同じく震災で倒壊した鎌倉の青蓮寺の玄関の材料を買い付けてこれも移築した。恒覧自らが著し、昭和10年（1935年）9月20日に発行された『清香園誌^{せいこうえんし}』には、2,400坪と記されている広大な敷地内に、当時造営された建物がいくつも示されている。登録有形文化財である。



写真2-223 榑亭

建物は、前述のとおり大規模養蚕農家と寺院の玄関を改造し、合体させ、1階を増築して2階建てにしたてあげたものである。個々の素材は江戸時代にさかのぼるものもある。もとは土間であった洋室は、高い梁を交差させた天井をもち、壁はサークル塗りの粗面モルタル仕上げで、西壁には9枚のステンドグラスが置かれ、和洋の混在した雰囲気醸し出されている。

(b) 扇湖山荘^{せんこさんそう}

鎌倉山に所在する建物の中でもひととき存在感を有する「扇湖山荘」は、製薬会社「ワカモト製薬」創業者の長尾欣彌^{ながおきんや}の別荘として建てられたもので、分譲地略図の東南に「長尾」の文字が見えることから、分譲当初から建設が予定されていたことが分かる。



写真2-224 扇湖山荘

扇湖山荘という名は、建物から一望できる相模湾が扇型をした湖のように見えることから付けられたものであり、東京大学名誉教授で建築史などが専門の鈴木博之が平成14年（2002年）に著した『長尾欽彌旧別邸 扇湖山荘』によると、飛騨高山から昭和9年（1934年）に移

築した民家に手を加えた建物と、高名な作庭家によってデザインされた日本庭園を持つ戦前の和風文化を画す代表的な大型遺構である。建物は、地下階がある2階建てで、鉄筋コンクリート造りの地下室の上に移築改造された民家が載っており、1階の南面・東面はテラスとし、砕いた陶器が敷きつめられている。太い梁や入母屋屋根など民家の構造を残しながら、近代和風建築の要素も備えている。



写真2-225 扇湖山荘から望む海

平成 22 年 (2010 年) 10 月に鎌倉市が寄付を受けた。

社会式株道車動自本日本
 (會六四八金鎌訪者) 所業營倉鎌社同
 所業營佛大社同
 所業營口島江社同
 (會二六四金鎌訪者) 店分山倉鎌ルテホ國帝
 前口道車動自取船大業鎌
 所前 取 倉 鎌
 前 傍 大 客 長 倉 鎌
 場 庫 休 口 島 江
 山 倉 鎌

圖畧地讓分社會式株地宅住山倉鎌

(車下口道車動自取船大) 前場留停山倉鎌縣奈神 社本
 (會五八金鎌訪者) 社會式株地宅住山倉鎌

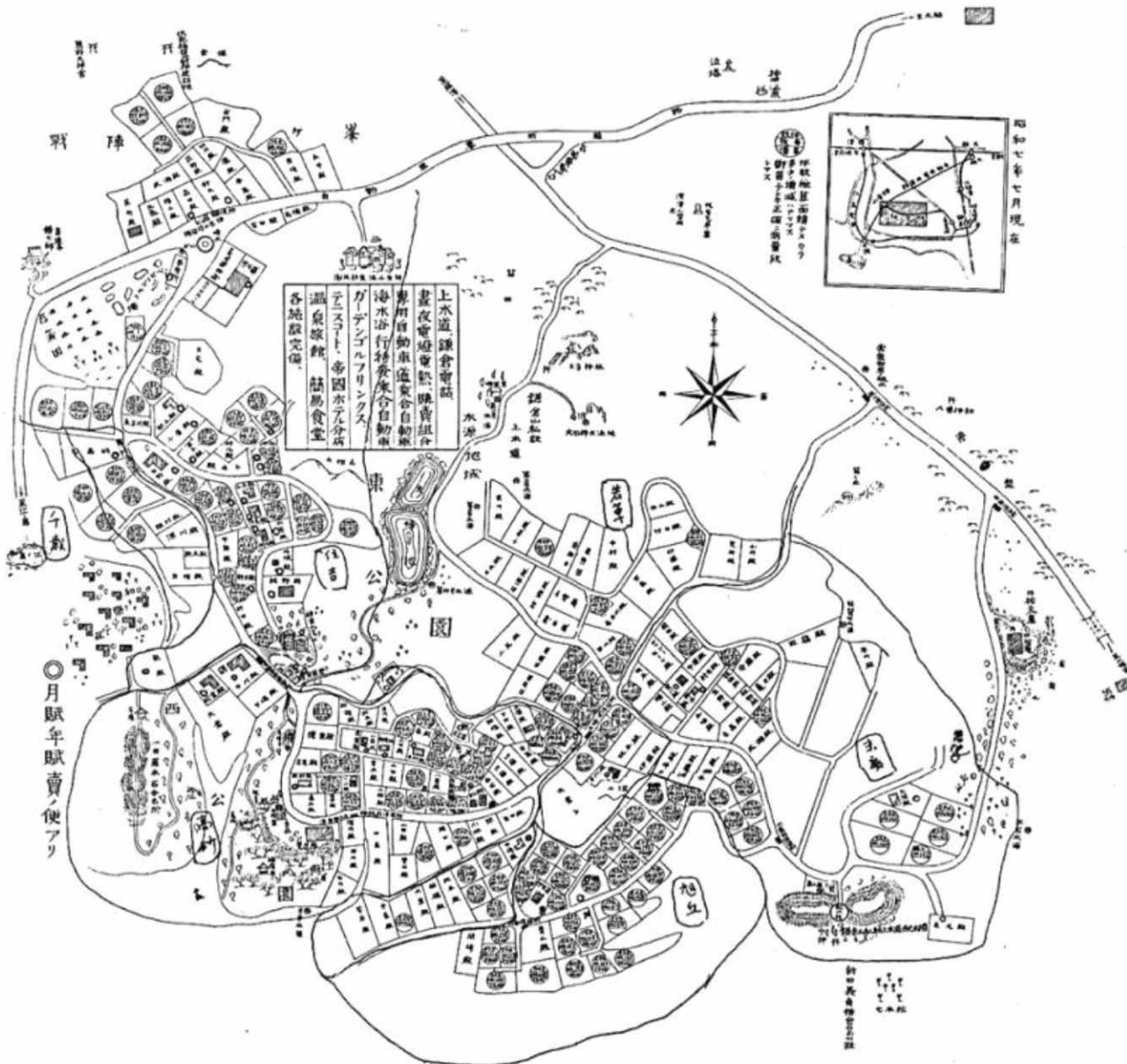


図2-32 鎌倉山住宅地株式会社分讓地略図

(c) 鎌倉山石柱（鎌倉山ロータリー）

鎌倉山のロータリーの中央にある「鎌倉山」と刻まれた石柱がある。これは、関東大震災で倒れた鶴岡八幡宮の三の鳥居の1本を譲り受け、昭和44年（1969年）に建国記念日創設を記念して菅原通済が建てたものである。石柱の下には、鎌倉山の開発や石柱の建立について記された石碑（昭和44年（1969年）銘）がある。



写真2-226 鎌倉山石柱

(d) 鎌倉山碑

鎌倉山碑は、石組みの礎石に乗った高さ4m余りもある大きな石碑であり、昭和10年（1935年）に建立されたことが刻まれている。鎌倉山の開発について、その歴史が刻まれている。



写真2-227 鎌倉山碑

d 鎌倉の文化人に関する建造物

(a) 旧大佛次郎茶亭^{おさらぎじろう}

旧大佛次郎茶亭は若宮大路とその東側に並行に走る辻説法通りに挟まれた、ゆるやかにカーブする細い路地沿いに位置し、落ち着いた色調の板塀は、郷愁をいざなう路地景観を形成している。板塀の奥には、鎌倉文士の交流の場でもあった茅葺き^{かやぶ}の茶亭が残る。建物は大正8年（1919年）頃に建築⁶⁰されたとみられる。茅葺屋根を持つ数寄屋風の平屋建てである。鎌倉風致保存会の指定保存建造物になっている。



写真2-228 旧大佛次郎茶亭

⁶⁰ 平成25年（2013年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

よしやのぶこ
(b) 吉屋信子記念館

吉屋信子記念館は、鎌倉文学館から200m程南東に進んだ閑静な住宅街に位置する。建物は、近代数寄屋建築の第一人者である吉田五十八よしだ いそやが昭和37年（1962年）、吉屋に「奈良の尼寺のように」と望まれて設計を行ったと伝わる。木造平屋建てで、平面西には、コンクリートブロック造りの倉庫が付属する。和風要素を巧みに取り入れた建築である。

建物内部の書斎は吉屋信子の生前のままの形で保存され、春と秋に一般公開を行い、直筆原稿や愛用品を展示している。市民の学習施設として、昭和49年（1974年）の開館以来、多くの人々に親しまれ、利用されている。登録有形文化財である。



写真2-229 吉屋信子記念館

かわきた わつじ
(c) 旧川喜多邸別邸（旧和辻邸）

旧川喜多邸別邸（旧和辻邸）は、寿福寺の東側から横須賀線の踏切を渡り、小町通りへ至るまで続く窟小路いわやこうじに面し、その黒い板塀は、鎌倉の小路の景観をより印象深いものとしている。ここは生涯を通じて外国映画の輸入と配給、海外への日本映画紹介などに情熱を注いだ川喜多長政・かしこ夫妻の住んだ地である。敷地内にある棧瓦葺き寄棟の木造平屋建ての和風建築は、東京にあった哲学者の和辻哲郎の住宅を昭和36年（1961年）に移築⁶¹したものである。東京にあった和辻哲郎の住宅も、もとは移築されたものであり、昭和13年（1938年）に江戸後期創建と見られる神奈川県大山の麓にあった古民家を解体し、東京に移築したと伝わる。旧市街地の谷戸の高台に建つこの建物は、背後の山並みと棧瓦葺きの屋根が調和し、地域を代表する魅力的な景観を形成している。平成6年（1994年）に市に寄贈された後、東側にあった母屋は、川喜多映画記念館として建て替えられ、旧川喜多邸別邸（旧和辻邸）とともに映画文化の歴史を伝えている。

写真2-230 旧川喜多邸別邸
（旧和辻邸）

⁶¹ 平成25年（2013年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

(d) 鎌倉国宝館

鎌倉国宝館は、鶴岡八幡宮の境内にある鎌倉市の博物館である。大正12年（1923年）の関東大震災により、鎌倉の社寺等の建物が倒壊し、貴重な文化財が損失したことから、不時の災害から鎌倉の文化財を保護し、また、鎌倉を訪れる人々が文化財を見学できるよう一堂に展示できる施設として設立が計画された。

鎌倉同人会が中心になり、鎌倉町とともに設立にあたり、鎌倉同人会をはじめとする多くの人々の寄付により、鎌倉市域に所在する寺社から多数の宝物の寄託を受け、昭和3年（1928年）4月3日に開館した。

建物は、登録有形文化財であり、鉄筋コンクリート造りの高床式で校倉造風となっている。設計は、鎌倉同人会員であった岡田信一郎で、外観を奈良の正倉院に模し、内部は鎌倉時代の寺院建築の手法が用いられている。寄棟瓦葺き屋根の中央部には、小屋裏位置に採光用の越屋根あぜくらを隠し、さらに内部では虹梁大瓶束形式で採光用越屋根の棟を支える造りとなっている。



写真2-231 鎌倉国宝館

(e) 日本基督教団鎌倉教会会堂

日本基督教団鎌倉教会会堂の歴史は古く、鎌倉に当教会の伝道が開始されたのは明治30年（1897年）に遡る。

専用の木造の会堂が建てられたのは明治40年（1907年）5月18日で、設計は当時の牧師である鵜飼猛、施工は戦前の鎌倉大工の代表である三橋直吉であった。しか



写真2-232 日本基督教団鎌倉教会

し、この会堂は大正12年（1923年）の関東大震災で倒壊し、しばらく仮会堂の期間を経て、現在の会堂は大正15年（1926年）の建築⁶²である。現会堂は創建後、便所と塔屋4階部の増築がなされたほか、微細な補修・改修を受けたのみで創建当時の姿を保っている。

正面のトレーサリーを伴った大きな尖頭アーチ窓など初期ゴシック的スタイルを持ち、戦前のプロテスタント教会会堂の代表例の一つとなっている。鎌倉教会現会堂は鎌倉における最初期の鉄筋コンクリート造りとされているが、鉄筋コンクリート造りであるのは四周の壁のみで、小屋組は鉄骨造、内部間仕切、2階の床等は木造であり、一種の混構造ということもできる。外壁は目地を切って石造に擬すなど、様々な構造を用いて石造教会堂を模しているが、これらの構造材料は違和感を抱かせずに溶け合い、統一的なゴシック調を生み出している。

⁶² 平成25年（2013年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

(f) 日本基督教団鎌倉教会会堂付属ハリス記念幼稚園

ハリス記念鎌倉幼稚園は明治 43 年（1910 年）創立で、市内で最も古い幼稚園である。

園舎は大正 14 年（1925 年）の建築⁶³で、「梅鉢型園舎」という、中央に遊戯室があり、それを囲むように舞台・教室が配置されている。

「梅鉢型園舎」の他の特徴として、鉄骨トラス構造の屋根部分で、44 尺の径間を縦横に行き交うキングポストトラスで支えられていることが挙げられる。弦材が水平でなく、中央が高くなっており、内部空間にもドームの様な求心性を表現しようとした意図がみられる。それを可能にしたのは、鉄筋コンクリートと鉄骨という新しい技術であり、こういった技術面においてもこの建物は貴重な遺構であるといえる。



写真2-233 日本基督教団鎌倉教会
付属ハリス記念幼稚園

(g) 鎌倉聖ミカエル教会聖堂

鎌倉聖ミカエル教会聖堂は昭和 8 年（1933 年）に建築⁶⁴された。その後増改築が行われ、現在、創建当時の姿をとどめているのは聖堂前部のみである。

現聖堂は押縁下見板張りの簡素な和風建物である会館及び牧師館とともに建築された。その後、昭和 13 年（1938 年）に小町通り側の隣地を購入し、現在のような敷地形態となった。昭和 40 年（1965 年）には、和風



写真2-234 鎌倉聖ミカエル教会聖堂

の会館及び牧師館が大幅に改造され、ほぼ現在のような姿となった。このとき聖堂部も西側に礼拝準備室が付け加えられ、東側の礼拝準備室は倍近くに広げられた。さらに昭和 41 年（1966 年）、敷地の北東隅に 2 階建ての牧師館が竣工したが、その後現在の建物の老朽化に伴い、平成 12 年（2000 年）に会館と牧師館を改築し、現在に至っている。

なお、この教会の名称であるが、当初は鎌倉聖公会と称していたが、昭和 17 年（1942 年）からは日本基督教団鎌倉小町教会と称すことになり、そして昭和 23 年（1948 年）からは再び日本聖公会鎌倉聖ミカエル教会と改称して現在に至っている。

外観は、下見板張りの外壁に両開き窓を配した素朴なものだが、ブラケット、三連アーチ窓、垂木下端部の線形に手の込んだ細工の美しさが見られる。内部はみごとな技巧の天井や家具、照明器具などが、創建当初のまま残されている。この聖堂を守ってきた信徒の知恵と鎌倉の大工の昭和初期の力量を示す貴重な建物である。

⁶³ 平成 25 年（2013 年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

⁶⁴ 平成 25 年（2013 年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

(イ) その他の建造物

本計画において、後述の活動が認められず、歴史的風致の形成を担っている建造物として位置づけてはいないものの、別荘地として栄えた鎌倉らしい景観を形成する建造物を抜粋して記載する。

a かぶらぎきよかた 鏑木清方記念美術館

鏑木清方記念美術館は、川喜多映画記念館から南に100m程進んだ場所にある。鏑木清方は女性の美や庶民生活などを題材とした近代日本画の巨匠で、文化勲章を受章している。この地は鏑木清方の自宅があった場所で、平成6年(1994年)に市に寄付され、美術館として作品を公開している。なお、清方も前述の吉屋信子記念館の設計者、吉田五十八と懇意にしており、戦前東京に住んでいた清方の自宅は吉田五十八の設計だった。昭和29年(1954年)鎌倉・雪ノ下に居を構える際、画室は吉田五十八の設計を再現したといわれている。美術館として整備されるにあたり、正面玄関と画室は昭和29年(1954年)当時の部材をそのまま使用し、再現した。



写真2-235 鏑木清方記念美術館

b 旧神奈川県営湘南水道鎌倉加圧ポンプ所

主要地方道藤沢鎌倉線の大仏坂トンネルの鎌倉側すぐ手前の東側に建つ旧神奈川県営湘南水道鎌倉加圧ポンプ所は、神奈川県営水道の最初の事業である湘南水道の加圧ポンプ場で、相模川から取水した水を湘南の地域に供給するため、昭和11年(1936年)4月に建設されたものである。建築物は、昭和41年(1966年)年4月から平成14年(2002年)2月まで鎌倉市の大仏坂体育館として用いられた。神奈川県営の水道事業の最初の水道施設であり、別荘などに水を気供給する戦前の鎌倉の水道施設の希少な遺構であり、登録有形文化財である。また、全面クラッチタイル張り外観は、大仏坂トンネル近辺における特徴的な景観を形成しており、大仏坂トンネルともあいまって、鎌倉の戦前の産業遺構群を形成している。



写真2-236 旧神奈川県営湘南水道
鎌倉加圧ポンプ所

エ 活動

(ア) 建築物の保存・継承活動

前述した建造物は、多くの別荘建造物、別荘文化にまつわる建造物が老朽化や維持管理の困難さから失われていく中で、市民の活動により守られてきた。鎌倉に点在するこれらの建造物は、単なる建築物としての価値にとどまらず、そこに関わる人々の手入れや営みによって、静かにその存在感を放っている。市街地のなかにあっても一際目を引き、時の重なりや文化の層を感じさせるそれらの風景は、「いざ鎌倉」～歴史と文化が描くモザイク画のまちへ～という日本遺産のストーリーにおける象徴的な風景となっている。

a 旧華頂宮邸の保存・継承活動

旧華頂宮邸では、平成8年（1996年）5月、市が譲渡を受け、庭園の一般公開等を行っている。その中で、市と連携し、旧華頂宮邸の維持、管理、美化、邸内公開日やイベント開催のボランティア活動を行っているのが宅間ボランティアの会である。定期的に行われている庭園整備のときなど、ボランティア活動をしている様子が周辺の道路から見る事ができる。

この宅間ボランティアの会は、旧華頂宮邸が位置する宅間谷戸の親睦団体で、作家の林房雄が会長を務めた「宅間会」を前身とした市民団体であり、鎌倉市が旧華頂宮邸を譲渡された平成8年から、旧華頂宮邸の維持管理活動に携わっている。

「宅間会」の正式な設立時期は分からないが、昭和16年（1941年）発行の『文藝春秋』に寄せた林房雄の文章内で、隣組の制度によって宅間谷戸の住民が親睦を深めている様子が書かれている。その後、宅間会と称されるようになり、平成14年（2002年）に現在の宅間ボランティアの会となった。

当初の住環境の向上等を目的とした市民活動から、近年は、宅間谷戸を学区にもつ中学校の学生を対象とした「景観ウォーク」を開催し、宅間谷戸の歴史、文化、自然を伝える活動も行っている。イベント当日は、宅間ボランティアの会の人々に連れられて、地域について学ぶ真剣な子供たちの様子を見ることができる。

旧華頂宮邸だけではなく、宅間会や宅間ボランティアの会が守り伝え続けている宅間谷戸の自然環境は、旧華頂宮邸の背景に緑が美しく映える景観そのものを守ることにも繋がっており、往時の情景を今に残している。



写真2-237 宅間ボランティアの会の維持管理活動の様子

b 坂井家住宅における保存・継承活動

坂井家住宅は、平成 25 年（2013 年）に鎌倉風致保存会に寄贈されるまでは、住居として使用されていたため、一般に公開はされていなかった。しかし、昭和 50 年頃（1975 年）より前から、前所有者で水彩画家として作品を残した坂井武三郎さかい ぶさぶろうが和館、洋館、また敷地内の水彩画を多く描いており、作品を絵画コンクールや展示会に出展することで、歴史的な建造物として周知・啓発に努め



写真2-238 風致保存会による庭園整備の様子

ていた。また、鎌倉風致保存会に寄贈されてからは、ボランティアによる庭園、敷地の整備が行われており、活動の日には、庭園の整備をしている様子を周辺の道路から見る事ができる。

c そのほかの建造物における保存・継承活動

旧大佛次郎茶亭は、大佛次郎が亡くなった後も野尻家が所有し、昭和 58 年（1983 年）に鎌倉風致保存会の保存建造物に指定し、鎌倉風致保存会の協力を受けながら保存と春と秋の一般公開を行っていた。しかし、次第に維持管理が困難になり、所有者が平成 31 年（2019 年）売却を決断、なかなか買い手が見つからない中、解体の可能性もあったが、貴重な遺構がなくなる危機感から個人の手が挙がり、有志が集まり、「一般社団法人



写真2-239 風致保存会による庭園整備の様子

大佛次郎文学保存会」が令和 2 年（2020 年）に継承した。その後、同団体と鎌倉市風致保存会により、春と秋の公開が行われており、公開日には旧大佛次郎茶亭を見ようと市内外から人々が集まってくる様子が見られる。

(イ) 別荘文化を支えた人々の営み

鎌倉に一時的に滞在する人や常住するようになった「別荘族」を相手とした由比ガ浜通沿い、坂ノ下、長谷近辺の商業活動では、別荘を持つ顧客への品質の高い商品の提供や「御用聞き」と呼ばれるサービスの提供など、商店の創意と工夫の積み重ねによる独自の商業体系が発展した。明治45年(1912年)に大橋良平が著した『現在の鎌倉』には、「毎年七月中旬か又は八月上旬頃より、九月の下旬頃迄の様に、必ず此地に来て別荘或は貸別荘又は貸間に避暑する人が多い、之れ等の人を別荘客、避暑客と云ふて、鎌倉土着の諸商人貸家業者は崇拜するのだ、それでも鎌倉人士の財源は全く此避暑客別荘客にある



写真2-240 配達の小僧さん
(昭和12年(1937年))

からだ、鎌倉は此夏期をとしてあるので一部の営業者の収入が一年の諸経費に充てられるのである。」とあり、当時の商店が別荘に滞在する顧客向けの営業で潤っていたことが分かる。

現在もこの地域では、米、酒、うなぎ、蒲鉾、鎌倉彫などの老舗が高品質な商品の製造・販売を続けており、古くからの建物で営業を行っている店もある。これらの商店では、お客様への商品の配達など、「御用聞き」に由来する配達文化が残っている店舗もあり、配達を行っている様子を時折見ることができ、かつての別荘地としての風情を感じ取ることができる。

例えば、由比ガ浜通り沿いに店を構える「柴崎牛乳店」は、初代店主の柴崎梅吉が、明治23年(1890年)に横須賀から鎌倉村に移転し、当時この地で牛を飼いながら、別荘で過ごす人々に牛乳を配達していたという。

鎌倉を代表する土産物であり、伝統的工芸品である鎌倉彫も、鎌倉の別荘地化と深く関わりあい、発展していったものの一つである。それまで主に寺院の仏具や茶道具を作成していた仏師たちは、廃仏毀釈の風潮などによって造像の需要が激減した後、別荘を構えた上流階級の人々の需要に合わせ、家具調度品や工芸品の製作を主体とするようになり、それが鎌倉彫として浸透、発展していった。この地に残る「寸松堂」、「白日堂」のような店舗兼工房は、こうした歴史を今に伝える鎌倉彫の商店兼住宅として貴重な存在といえ、建物自体が伝統を物語る存在であり、外からも歴史と文化の気配が漂う。時折、通行人が足を止めてショーウィンドウに飾られた鎌倉彫を鑑賞する姿を見ることができる。

寸松堂は、大正10年(1921年)の創業であり、大正13年(1924年)に現在の寸松堂が建っている場所の近傍に店を構え、その後移転した。工房を備えた店舗兼住宅において営まれている鎌倉彫の製作・販売は、特徴的な建物と調和することによって、鎌倉彫の歴史と伝統を今に伝えている。重厚な店内に足を踏み入ると茶托や鏡類、銘々皿、盆、菓

子器など様々な作品が取り揃えられている。

白日堂の創業は、昭和9年（1934年）にさかのぼる。創業者の伊志良不説は、寸松堂二代目の佐藤泰岳の実兄であり、泰岳は佐藤家の養子として寸松堂を継いでいる。不説は戦前、主に茶道具を製作し、戦後は若い弟子たちの育成や工房・店の経営に努め、厳しい時期を乗り越えてきた。こうした折、横須賀に進駐した将兵が鎌倉を訪れた際、鎌倉彫を購入するようになり、中にはテーブルを注文する者もいたという。現在、白日堂では、女性の店主が彫るオーダーメイドのブローチ等が人気を博している。

これらの店舗以外にも別荘文化が発展した時代から商いを続ける店舗が複数あり、別荘文化の記憶を今に伝えている。

表2-10 別荘文化が発展した時代から商いを続ける店舗

店名	所在地	創業時期	備考
寸松堂	笹目町	大正時代	鎌倉彫工房
白日堂	長谷三丁目	昭和初期	鎌倉彫工房
柴崎牛乳店	長谷二丁目	明治中期	食料品店
三留商店	坂ノ下	明治中期	食料品店
内田理容館	由比ガ浜一丁目	大正時代	理容院
山源 石渡源三郎商店	長谷二丁目	明治初期	乾物屋
紅家美術店	長谷三丁目	明治初期	骨董品店
つるや	由比ガ浜三丁目	昭和初期	飲食店
井上蒲鉾店	由比ガ浜一丁目	昭和初期	食料品店



図2-33 別荘文化が発展した時代から商いを続ける店舗(長谷駅周辺)



図2-34 別荘文化が発展した時代から商いを続ける店舗(由比ヶ浜駅・和田塚駅周辺)

意思を表明した。その後も、更新が行われる5年ごとに、その判断を住民にゆだねてきたが、住民の判断は一貫して市街化調整区域のままでいることを望むというものであった。

そして、これまで鎌倉山の景観を守り、引き継いできた先人の意識や活動は、現在この地域に住む人々にも受け継がれており、平成12年(2000年)には、鎌倉山町内会が主体となってまちづくりを行うための「鎌倉山のまちづくり計画⁶⁵」を策定し、快適な居住環境の保全と創造を自主的に進めている様子が見られる。

この計画では、建築物や工作物の外観に関し、原色や刺激的な色彩は施さないこと、道路との境界に塀を設置するときは出来るだけ生け垣を選択すること、止むを得ず既存宅地を分割する際には一定の敷地面積を確保するなどの具体的な取組が掲げられており、良好なまち並み景観を維持するため、町内会が中心となって様々な活動を行っている。

鎌倉山において大規模な宅地開発事業が計画されると、開発事業者は計画概要を町内会へ連絡し、これを受けた町内会は、1区画の敷地面積を60坪から100坪程度確保するよう事業者へ要請を行うほか、開発予定地の周辺住民へ計画概要を知らせ、住民の意向が開発事業者へ伝わるよう調整を行っている。また、分譲当初に植えられたと伝わる桜の木がまちのいたるところに立ち並び、鎌倉山を象徴とするもののひとつであるが、特に住宅街の中央を走る通称「バス通り」の沿道に並ぶ桜並木は、毎年桜の時期になると桜のトンネルとなり鎌倉山を彩る。この桜並木を保全するため、バス通り沿いに新たに住宅を建設する場合は、鎌倉山町内会では、5mごとに1本の桜の木を植えるよう施主に求める他、開発工事に伴い、止むを得ず桜の木を伐採する場合は、必ず失われた本数以上の桜の木を区域内に植えるよう事業者と協議を行っている。現在も、新しく植えられた桜の木と分譲当初に植えられ樹齢を重ねた木が作る桜並木のトンネルからは、鎌倉山の住民が桜のある風景を大切に思う思いが感じられる。

また、鎌倉山町内会が所有する「鎌倉山集会所」の建替えにあたっては、周囲の景観に馴染む集会所とするため、住民有志により検討委員会が結成され、地域にゆかりのある建築家数名から設計プランの提案を受けて住民投票で設計者を決定し、平成27年(2015年)に建替えが完了した。

この他、町内会だけではなく様々な自主グループが良好なまち並み景観を守る取組を行っている。住宅地西側のロータリー付近では、住民が定期的に道路の清掃活動を行うとともに、花壇に季節の花を植え、まちに彩りをそえている。また、鎌倉山の分譲当初に住宅地の鎮守として奉斎された「鎌倉山神社」や、「鎌倉山集会所」の敷地内などでも住民による自主的な清掃活動が行われている。

⁶⁵ 「鎌倉山のまちづくり計画」とは、鎌倉市まちづくり条例に基づき、一定の地区を対象として快適な居住環境の保全と創造を図ることを目的として、まちづくり市民団体が策定する自主まちづくり計画である。

個々の住宅でも、鎌倉山の自然が豊かな住環境を維持するため、家の敷地内に多くの植栽を施している。夏前や秋口には、住宅で植木屋による庭木の選定や植栽の整備が行われており、脚立や剪定道具を用いた作業の様子を見ることができる。鎌倉山において広大な敷地をもつ榑亭では、真竹の保護や外来植物の除却など、鎌倉山本来の植生にこだわった庭木の管理を行い、住環境の向上に努めており、日々、植栽を管理している様子を見ることができる。

このような住民の地道な努力の結果、まちに新しく建てられる建築物も既存の榑亭や扇湖山荘をはじめとした大区画の住宅が醸し出すまち並みに溶け込むよう配慮がなされ、良好なまち並み景観や住環境が次の世代に引き継がれている。



写真2-242 鎌倉山の桜並木
(昭和45年(1960年))



写真2-243 鎌倉山の桜並木

(工) 鎌倉の文化人にまつわる活動

a 文化人による鎌倉のまちづくり

令和7年（2025年）に設立110周年を迎えた「鎌倉同人会」は、陸奥宗光の子で外交官として活躍した陸奥広吉、洋画壇の大御所黒田清輝など、鎌倉在住の錚々たる人々が発起人となり設立された。彼らは鎌倉をさらに住みよいまちにする^{そうそう}ことや、観光地としても内外にもっとアピールすべきと考え、同じ志をもつ人々に呼びかけ、会を構成していった。鎌倉同人会では、創立当初から昭和にかけて鎌倉駅舎改築の要請、鎌倉国宝館の建設のほか、関東大震災のときには救護薬品の寄贈や復興の援助を行うなど、まちづくりに係る事業を積極的に進め、現在も歴史文化講座の開講や石碑の建立・保全など、鎌倉の文化の発展・向上を目指し、活動を続けている。

また、鶴岡八幡宮で毎年8月に行われる「ぼんぼり（雪洞）祭」（詳細は「社寺における祭礼・行事や信仰にみる歴史的風致」（66 ページ）及び「若宮大路周辺の営みにみる歴史的風致」（146 ページ）参照）は、「鎌倉ペンクラブ」のメンバーが中心となってぼんぼりを並べたことが始まりである。鎌倉に住んだ文化人により始まったこの行事は、当初のぼんぼりは200個ほどだったが、現在では、約400個のぼんぼりが鶴岡八幡宮の境内に並び、鶴岡八幡宮とその周辺を暖かい光で照らす光景が見られる。

旧大佛次郎茶亭を建てた大佛次郎と久米正雄が発案した鎌倉カーニバル（前述）は、鎌倉を国際都市にしようと昭和9年（1934年）から始められ、戦争のためしばらくの間途絶えたものの、再開通知から分かるように昭和22年（1947年）から復活し、昭和38年（1963年）に取りやめになるまでの間、鎌倉の夏を盛り上げた。現在、その精神を受け継ぎ、平成28年（2016年）から「鎌倉市民カーニバル」が、毎年5月に行われている。当日になると仮装をした人々によるパレードが鎌倉市役所から海に向けて行われ、楽しそうに歩く人々の姿や歓声が鎌倉駅から由比ヶ浜海岸まで続き、賑わいを見せている。



写真2-244 海浜ホテルの石碑



写真2-245 鎌倉カーニバル
（昭和9年（1934）年）



写真2-246 鎌倉カーニバル
仮装行列パレード
（昭和26年（1951）年）



写真2-247 鎌倉市民カーニバル

b 文化人と基督教の広がり

別荘地化が進むことで、鎌倉ではキリスト教徒たちが増えていった。鎌倉へ移住、もしくは別荘を構えた文化人をはじめとするキリスト教徒たちの信仰の中心として、日本基督教団鎌倉教会や鎌倉聖ミカエル教会は、重要な役割を担っていた。

(a) 日本基督教団鎌倉教会の活動

昭和6年（1931年）に本間俊平が著した『本間全集第5巻』には、日本基督教団鎌倉教会の講演記録があり、当時の活動をうかがうことができる。

現在は、毎週日曜朝の主日礼拝をはじめ、クリスマス、イースターなど、教会暦に基づいた年中行事も行われ、礼拝やイベント時に流れるオルガンと聖歌隊による音楽の響きは、教会の外を歩く人にも届き、教会の周辺は神聖な雰囲気で包まれる。



写真2-248 日本基督教団鎌倉教会堂のクリスマスマーケット

(b) 日本基督教団鎌倉教会付属ハリス記念鎌倉幼稚園における幼児教育

明治43年（1910年）に創立された日本基督教団鎌倉教会付属ハリス記念鎌倉幼稚園は、鎌倉の幼児教育の先駆けである。昭和初期の給食風景の写真から、昔から数多くの園児を迎え入れていたことが分かる。現在も静かにたたずむ園舎からは幼稚園に通う子供たちの歌声や活気が外からも感じられ、歴史的なまちなみと調和した鎌倉ならではの雰囲気を醸し出している。

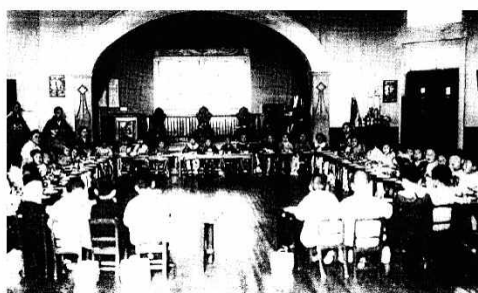


写真2-249 給食風景(昭和初期)



写真2-250 ハリス記念幼稚園の活動

(c) 鎌倉聖ミカエル教会の活動

鎌倉聖ミカエル教会の聖堂内には、昭和8年（1933年）付けの「聖別の証」が掲げられており、当時から活動を行っていたことが分かる。

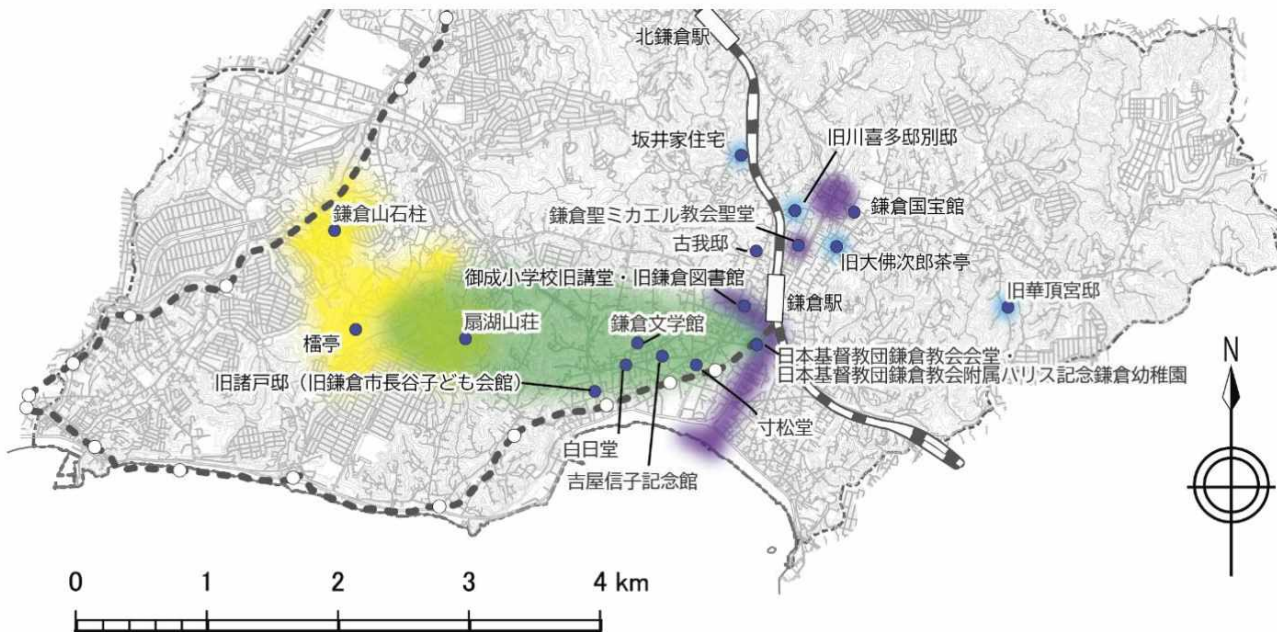
現在は、日曜日の礼拝以外にも、地域住民や観光客向けに、教会見学や建物公開、チャリティバザー、音楽コンサートなどを開き、地域に開けた教会としての取組を行っており、イベント時は、賑やかな声が建物の外まで聞こえてくる。



写真2-251 鎌倉聖ミカエル教会聖堂の礼拝の様子
(昭和40年(1965年))



写真2-252 鎌倉聖ミカエル教会聖堂におけるクリスマス礼拝の様子








	歴史的風致を形成する建造物
	建造物の保存・継承活動が見える範囲
	別荘文化を支えた人々の営みが見える範囲
	鎌倉山の住民等によるまちづくり活動が見える範囲
	鎌倉の文化人にまつわる活動が見える範囲

図2-36 別荘文化に由来する活動の市街地への広がり

表2-11 別荘文化に由来する主な活動の年表

活動種別	活動場所	現在の活動主体	昭和9年	昭和19年	昭和29年	昭和39年	昭和49年	昭和59年	平成6年	平成16年	平成26年	令和6年	現在	
			1934年	1944年	1954年	1964年	1974年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年		
建築物の保存・継承活動	旧華頂宮邸	宅間ボランティアの会	宅間会による住環境向上活動											
	坂井家住宅	鎌倉風致保存会	旧華頂宮邸一般公開の支援											
	旧大佛次郎茶亭	大佛次郎文学保存会	宅間ボランティアの会に改称 景観ウォークの開催											
別荘での人々の営み	寸松堂		工房兼住宅としての利用											
	白日堂		工房兼住宅としての利用											
	その他の各商店		別荘での生活を支える商い											
鎌倉山のまちづくり活動	鎌倉山石柱・鎌倉山碑を含む鎌倉山一帯	鎌倉山町内会	友美会設立 鎌倉山町内会に改称 町内の美化活動・景観の保全活動											
			桜並木の保全活動 自主まちづくり計画の作成・運用											
鎌倉の文化人にまつわる活動	市内各地	鎌倉同人会	鎌倉の文化の発展・向上を目指す活動											
	鶴岡八幡宮		ぼんぼり祭りの開催											
	由比ヶ浜海岸周辺	鎌倉市民カーニバル実行委員会	鎌倉カーニバルの開催 鎌倉市民カーニバルの開催											
	日本基督教団鎌倉教会堂		礼拝・イベントなどの活動											
	日本基督教団鎌倉教会付属ハリス記念鎌倉幼稚園		幼児教育											
	鎌倉聖ミカエル教会		礼拝・イベントなどの活動											

オ まとめ

鎌倉という地において別荘文化が栄えた背景には、多くの歴史的遺産を有し、古都の風情を湛え、温暖な気候に恵まれた海浜保養の適地であったことや、都心に近いという立地に加えて、横須賀線の開通により鎌倉に当時の日本の政財界の中心人物や文化人等の別荘が多く建てられ、それにより、地域の人々の営みに変化していったことがあげられる。

大正時代に起きた関東大震災をきっかけに、鎌倉は別荘地ではなく常住の地へと変わっていったが、この地で育まれた別荘文化は、ここに住まう人や訪れる人の間で引き継がれており、往時をしのばせる歴史的な建造物を核とした別荘地としての風情や趣が、今もまちの至るところに息づいた歴史的風致となっている。

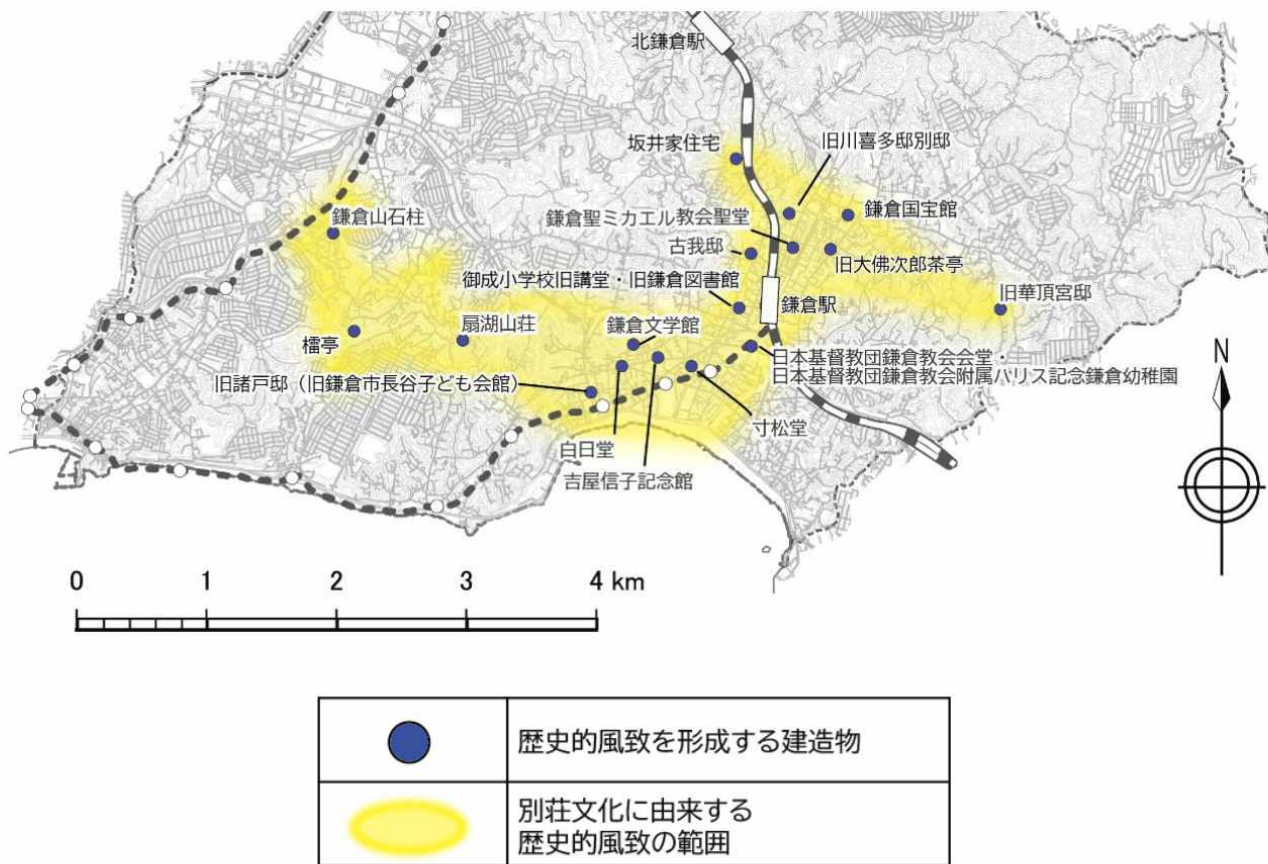


図2-37 別荘文化に由来する歴史的風致の範囲